

知恵の樹

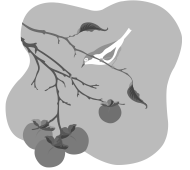
No. 133 2008. 10. 15

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局: 町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX042-722-1243

～「町田の図書館活動をすすめる会」入会にあたって～ 市民の立場から、職員の立場から、図書館の発展を考える

自治労町田市図書館嘱託員労働組合



嘱託員組合はこの度、「町田の図書館活動をすすめる会」の会員となりました。昨年11月の組合結成の折には、結成大会の報告をこの「知恵の樹」でさせて頂きました。私たち嘱託員は町田市内の図書館や文学館で、司書及び学芸員という専門職として、誇りと意欲を持って業務に従事しています。しかし嘱託という立場柄、労働条件は不安定でその報酬も生活を支えるには心もとない限りです。特に最近では23区のみならず、近隣の市町村立図書館にも委託や指定管理者制度の波が押し寄せ、将来も変わらずに勤務できるかどうか、雇用そのものに対する不安が常についてまわる状況にあります。そこで私たちは安心して仕事を続けていくために、身分の保障や雇用条件の改善を求めていく必要があると考え、昨年組合を立ち上げ活動をしてきました。

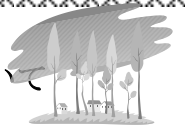
正規職員の減員に伴い嘱託の業務範囲は日々拡大し、担う役割も変化してきています。安定した継続雇用や、育児や介護をしながらでも仕事が続けられるような職場環境を目指し、経験を積んだ人材を確保するために交渉を行なっています。まだまだ駆け出しの組合でわからないことも多く、他市との交流会や勉強会に参加しながら、私たちの思いを理解して下さる方々と共に一歩ずつ歩みを進めています。さて、なぜ図書館は0歳のあかちゃんからお年

寄りまで、無料で利用することができるのでしょうか？それは憲法で保障されている基本的人権の「知る権利」の下に図書館法があり運営されているからです。図書館はわずか数十メートル四方の場所に、果てしない未知の世界が沢山詰まった出会いの森です。年齢や身分、人種にも捉われず、どのような立場の人でも自由に自分の可能性を広げることができます。その出会いの橋渡しをすることが私たちの仕事です。利用者が探している資料や情報を見つけ出し、無事に手渡すことができた時が司書冥利に尽きる瞬間です。

私の住んでいるZ市でも、図書館の委託問題が浮上し始めています。小規模な図書館ですが、その分小回りを利かせてユニークな企画で楽しい催しをしたり、予算や人手不足をボランティアの方たちとの連携で補い前向きなサービスを展開しています。図書館運営の民営化が流行りみたいになっていますが、せっかく培われてきた市民とのネットワークなどが損なわれないよう、市民の立場からも図書館職員としても、自分の町の図書館がどのような図書館であってほしいかということをしつかりと考える時期にきていると思います。

自身の知見を高めるとともに図書館を活性化するためにも、この会を通じて色々な方の声を聞きながら、町田の図書館や嘱託のあり方を考えていけたらと思います。よろしくお願い致します。

(仮題) 『浪江虔・八重子書簡集』の刊行について



刊行委員会代表 手嶋孝典

(原澤朋子・斎川美江)

はじめに

2003年10月から12月にかけて、町田市立自由民権資料館で「浪江虔・八重子と私立南多摩農村図書館」展が開催されたことをご記憶の方もいらっしゃると思う。あれからもう5年も経つのかとしばしば感慨に耽ってしまった。会期中、浪江先生について講演する機会が私に与えられ、その中で展示されていたご夫妻の往復書簡のことにも触れ、ぜひ世に聞きたいと話をしたことを覚えている。否、覚えているどころか、そのことを片時も忘れたことはない。

ご夫妻のご長女である野沢陽子さんのご理解を得て、書簡のコピーをとらせて頂いたのだが、それを何年も放置してしまっただけで、今年4月以降、多少自分の時間が持てるようになったので、町田の図書館活動をすすめる会(以下「本会」)に提案をして賛同を得、刊行委員会を立ち上げることができた。

考えてみれば、本会の前身である「町田の図書館をよりよくする会」を結成した中心は、他ならぬ浪江先生であり、市民運動によって公立図書館は発展することを喝破されていたのも浪江先生であった。もちろん、浪江ご夫妻のことをご存じない読者も多くいらっしゃると思うので、ご夫妻の簡単な紹介と書簡集刊行に至る経緯、そして刊行委員会の活動について触れることにしたい。

ご夫妻の略歴

浪江先生は、1910(明治43)年に生まれ、1930(昭和5)年に高等学校を卒業し、東京帝国大学文学部美学科に入学。その年の秋に全国農民組合運動に参加、1931(昭和6)年小作争議中の鶴川村(現町田市)にて活動、1933(昭和8)年に検挙され、起訴される。1935(昭和10)年農村定住を決意し、転向を表明、釈放(懲役2年、執行猶予4年)。

1936(昭和11)年浪江八重子さんと会い、農村定着の方針を語り、結婚の約束をする。4月から東京府立園芸学校第二部に通学、翌年3月卒業。

1938(昭和13)年結婚式で、農村定住の決意と農村図書館設立の計画を発表。板谷姓から浪江姓に。1939(昭和14)年鶴川村に定住、私立南多摩図書館開館。

1940(昭和15)年2度目の検挙、懲役2年6月の実刑、1944(昭和19)年1月末まで服役。図書館再開。この間、八重子さんは、浪江先生の園芸学校通学と同時期に水原産婆学校に通い、助産婦の資格を取得、1943(昭和18)年助産婦として開業。

1947(昭和22)年、鶴川村議に当選(一期だけで退く)。1948(昭和23)年から社団法人農山漁村文化協会の仕事に本腰を入れ、農民のための農業書の著作・編集に力を注ぐ。1959(昭和34)年、日本図書館協会の評議員になり、公立図書館の変革に取り組む。

1963(昭和38)年末に、町田市立図書館と協力して、地域文庫づくりの呼びかけを開始、図書館革命を推進。1968(昭和43)年、周辺の住宅地化により、農村図書館の看板を下ろし、私立鶴川図書館と改称。1989(平成元年)年、町田市立中央図書館の開館を翌年に控え、満50年を機に私立鶴川図書館閉館。

1993(平成5)年、八重子さん病没、1999(平成11)年浪江先生死去(鶴川村に定住して60年)。

以上、ご夫妻の略歴については、『図書館運動五十年—私立図書館に拠って』(浪江虔著、日本図書館協会、1981年)、『図書館そして民主主義』(浪江虔著、まちだ自治研究センター編、ドメス出版、1996年)を参考にした。

書簡集刊行の趣旨、刊行委員会としての活動

2度目の「国営アパート内地留学」中に、浪江先生が八重子夫人を中心に近親者と交わした膨大な数の書簡のやり取りを書簡集として刊行することにより、過酷な時代を生き抜いたご夫妻の軌跡を紹介するとともに、ご夫妻を顕彰したいと考え

るに至った。

併せて、世界に誇るべき平和憲法が蹂躪されつつある現在、敢えてその時代の一次資料を公開することにより、平和、人権、子育て、夫婦・家族の営み等々について、若い世代に向けても問題提起ができるのではと思った次第である。

刊行委員会は、本会会員の内、野沢さんを含む11人で構成され、書簡のコピーを基に、時には原本に直接当たりながら、入力作業とその確認作業を行っている。また、野沢さんの妹さんである稲庭ミ

ズホさん(浪江ご夫妻の次女)にアドバイスを頂いて、「書簡集入力の注意事項」を定めた。ご夫妻とご親族を含む書簡が膨大な上に、達筆ゆえに判読できない文字もかなりあり、四苦八苦しながらも楽しく作業している。現在、基本的な入力作業をほぼ終えて、確認作業と再入力作業を行っている段階である。今後、稲庭さんには、編集について相談させて頂くが、具体的な出版についてもお世話になる予定である。刊行時期については、来春を予定しているが、私の希望的観測に過ぎず、現段階では未確定である。ご期待ください。(本会会員)

看護学校図書館の思い出

武井 澄子

数年前、私は東京郊外の高台にそびえ立つ6階建ての白亜の殿堂？の中で図書館業務に励んでいた。公立の看護専門学校で、教室以外に実習室、パソコン室、体育館、ラウンジなどどれも広々と設計されていた。図書館も同様、広い閲覧室と司書室があった。図書館システム、無断持ち出し防止装置を取り入れ、同じ系列の学校のモデル校といわれていた。司書はローテーション制で4人体制。担当の教員、図書委員の学生達と図書館運営にあたった。図書委員会も毎月開催された。学生は高校新卒者は半分位、あとは、社会人経験者、主婦、看護助手、定年近い熟年者、など10代から五〇代まで幅広い。出産で一時的休学し、出産後復帰したママさんもいた。寮もあり、地方出身者も熱心に寮と学校を往復して学んでいた。3学年、400人位の規模で皆、真剣に未来の看護師めざし、仲良くアットホームな学び舎だった。

蔵書は看護関連7割、医学関連2割、その他1割の構成で1万数千冊、雑誌は20誌位、殆ど看護系である。貸出、返却はバーコードチェック。この手続きを無視して出ようとすると、システムが作動し、ブーツと大きな音をたてる。金属が探知され誤作動する事は他の図書館でも見られる光景である。時たま鳴ると学生は焦ってカウンターに戻る。大体は手続きしたとの勘違いが原因と、好意的に解釈し軽く諷める。事実、学生達は本当に驚く位、熱心に勉強する。私はこれ程学んだらうか？と反省する位、人気の個人机で閉館時間までひたすら資料と取り組んでいる。確かに人間の生命を預る医療に携わる仕事なのだから、一つ一つが大事な内容で真剣にならざるを得ないのだろう。演習用ビデオもあり、グループでディスカッションしながら皆、くいいる様に画像に見入っていた。

学生からでなく副校長からも、ある脳外科患者のケアについてのビデオ探しを依頼され、色々探して何とか入手し、大変喜ばれた。授業は1年生は基礎学問を学び、2年生の冬に初めて実習が始まる。臨地実習一ヵ月。ここが将来の方向を決定づける大きなヤマ場、最初の試練となる。理論とは全く異なる実際の医療現場で患者、医療者の中で、もまれ、鍛えられていく。叱咤激励される事もある。そう、生命がかかっているのだから・・・。

そんな中、技術の未熟さに自分は向いていないのでは悩む学生。指導者、患者、看護師達の迫力に押され落込む学生。人間関係に戸惑う学生。生々しい臨床現場で、ショックの大きい学生、など。トイレで涙する学生もいた。様々な体験を乗り越えて、看護職を再認識し、改めて看護の道を進もうと決意する。8割位は第一関門を通過するが退学者も必ず出るのがこの実習との事。3年になると12月迄は週1日、登校するのみで、すべて実習にあてられる。成人、母性、小児、老人、精神などのグループ単位ですべての課程を修了すると、もう看護師国家試験が目前に迫る。今迄の理論、実習の集大成。

実習中の週1回の登校日、図書館は大賑わい。担当する患者の病気について、ケアについて食欲に

資料を探し、学び、借り出していく。書架の前はごったがえし状態。人気の図書は予約がすぐ入る。(主に内科、外科の基本書)お互いに実習情報の交換や悩み、相談など賑やかだが注意するのは、よほどの時だけ。「私の担当の患者さん、亡くなってしまったよ～」とショックとうろたえる様など、医療現場を垣間見たり、小児担当の学生と、一緒に折り紙の本を探し、頑張ってねと、皆に心からエールをおくる。時間を忘れ勉強に没頭する学生にカセット音楽を流し、閉館時間を知らせる事にした。ドボルザークの「家路」である。非常に効果的で皆、素直に帰ってくれた。とにかくナースの卵達は本当に純粋で優しいのだ。圧倒的に女性が多い中、男性ナースマンの卵も奮闘していた。近年、ナースマンも増加して喜ばしい傾向である。体力的に男性看護師の必要度が見直されている。災害援助派遣では大活躍したと実際の体験者の話である。

延滞、督促は今では考えられない位、個人情報はおおっぴらであった。延滞者リストは入口に掲示され、慌てて返却する者、又貸して焦るもの、名前を見つけれ、冷やかされる者、のどか？な時代であった。

夏期、冬季休みは図書館も閉館される。公立故、経費などの関係からであろう。だが国家試験を控えた3年生は、資料を利用して勉強したい、とスタッフに言ってくる。「副校長に陳情したら？スタッフは大丈夫だから」と話すと、本当に訴えたいらしい。冬休み3日間、予定外に図書館開館した。試験日直前まで、必死に勉強に取り組み、いよいよ明日は国家試験という日、ある女子学生から「図書館でたくさん勉強させてもらいました。ついては応援の握手してもらえますか？」と清々しい笑顔で頼まれた。喜んで応じたのはいうまでもない。「がんばってね！」と力強く握手した。その手は2月のせいかわたかった事を覚えている。「ありがとうございます！」と喜んで帰って行った。無論、合格した彼女、今はどこかの病院で活躍しているだろうか？他の学生たちは？・・・様々な思いが胸をよぎる。

図書館のカウンターで学生相手に、我々スタッフの出来る事は限られている。日常の貸出、返却、文献探し、レファレンス等の業務だけでなく、図書館はホットできる場所、オアシスであるよう利用者をサポートできる司書でありたい— どの図書館で働いても変わらぬ私の信条である。(会員)

町田市立図書館はありがたい 小南 征二

ドイツのフンボルト大学の学生をはずかったことがあります。彼女は日本語のクラスを取っていて、そのブラッシュアップのために日本に来たのです。

彼女は「ホーブレヒト」という人物について作文を書くという宿題を持ってきました。東京の下水道計画に関わった人物ということなので、中央図書館の郷土資料コーナーで探しましたが、なかなか見つかりません。レファレンスカウンターで検索してもらおうと『明治の東京計画』の目次に「ホーブレヒト」が載っていて、中央図書館の蔵書は貸出中でしたが、さるびあ図書館にも所蔵しているので、とりおいてもらい、さらにどの程度「ホーブレヒト」についての記述があるか確認してくれました。彼女は内容の説明を聞いて、岩波現代文庫版を購入して、帰国しました。きっと良い論文が書けたことと思います。

私はといえば、最近山と温泉のガイドブックを借りることが多いのですが、ガイドブックは著者により、重点の置き方が違うので、10冊ぐらいいは比較して、自分独自の案をつくります。この夏は白川郷の合掌造りの民家に宿泊できるという情報が得られ、娘に紹介したところ、大変喜ばれました。

登山のコースも数冊の情報を元に自分なりのコースを作成しています。

中央図書館・さるびあ図書館の新刊書コーナーを見るのが楽しみです。毎回5冊くらいの読みたいものを見つけることが出来ます。知らなかった著者との出会いによって世界が広がります。これは、新聞・雑誌の書評・広告を見てもかなえられるものではありません。また、新刊書だけでなく、既刊書についても、思いがけない図書が所蔵されていて、嬉しくなります。「ラジオ深夜便」の「こころの時代」でお話された方の著書を借りることが何度もありました。

町田の図書館が、より充実されることを願います。

(こみなみ せいじ/新会員)

成瀬センターまつりに参加して
～ かえで文庫から ～

れる和やかな挨拶を聞いていると、地域に根付いたセンターであり祭りであると実感します。グラウンドの中央にできた櫓を囲んで、焼きそばやおでんなど11の模擬店が店を並べ、ホールでは2日間にわたって30の団体が日ごろの練習の成果を発表しました。保育園児の太鼓、高校生のブラスバンド、年配の方たちのコーラス、フラダンスなど、歌あり踊りあり皆さん実に多才です。また室内展示でも生け花や書道、絵画などの作品が所狭しと並べられました。

かえで文庫もこの日は喫茶室に変身です。このセンター祭りでの売り上げは1年の活動費となります。はじまりは、来賓の方たちの休憩場所として、お茶のサービスをしようということだったそうです。今ではすっかり定着して、成瀬センター運営委員会の来賓の方たちの利用は勿論、出演者の方たちやお友達、いろいろな方たちが手作りケーキやお菓子を前に楽しいおしゃべりに花を咲かせています。

残念ながら子どもの姿は少ないのですが、それでも文庫の常連さんが来てくれたり、大きくなって文庫から離れてしまっても、懐かしいと訪ねてくれる子もいます。また、活動費に使ってくださいと寄付を下さる方もあります。

地域の方たちに支えられて、これからも地域の文庫として子どもたちの心地よい居場所になっていけたらと思います。(太田晶子)



読書会を楽しむ ～大好きな古書店～

小林陽子

隔月、課題本を決めて互いにその本について話

し合う読書会に参加しはじめて通算2年位になります。8人前後の個性豊かな人たちとのそれは、本にまつわるエピソードから作家にまつわることまで飛び出し、話題豊富で、私にとって楽しく本を読む刺激剤にもなっています。

9月は、天藤真作『大誘拐』が課題本でしたので、中央図書館に行って調べると、徳間書店の単行本1冊のみ蔵書としてありましたが、生憎貸出中とのこと。急いで読む必要がありましたので、その足で、町田では古書店として老舗の「高原書店」へ行って調べてもらいました。すると、数冊が文庫本になって出版されているというのです。双葉文庫の版があったので、早速買い求め読書会の日までに読むことが出来ました。

『大誘拐』は、誘拐に成功した犯人が100億円の身代金を得るのですが、悪人は一人もいないすごい本です。図書館にない本や手許に欲しい本があると、私はすぐに「高原書店」へ行き、読みたい本を手に入れます。(会員)

9月27日(土)・28日(日)の2日間 成瀬センターまつりが開かれました。今回で28回目となる祭りも、今年は天気に恵まれて延べ1000人の方たちで賑わったようです。「久しぶり」とあちこちで交わさ

授業で出会った学生たち ⑥

本は心の栄養源 山本 宣親

「これでも大学生の書いたものか！」とあきれられるほど稚拙なレポートに出会うことがある。おそらくこれまでの読書力が貧弱であったからであろう。読書力の豊かな学生は課題に見合った参考資料の数が多く、引用の仕方も適切である。そして、文章の書き方もよろしい。こうした力は大学生になって急につくものではなく、幼児からの読書体験の蓄積の差である。

私は図書館に在職中、本を借りていくと母親に叱られるという児童の存在に気づき、それも高学年ほど多いことに驚き残念に思った。館内で本を家に持ち帰りたいとせがむ子と、それを即座にはねつける母親の光景を何度も目撃した。「勉強の妨げになる」というのである。これはわが子の読書の萌芽を摘んでしまう愚かな行為。本は内面の成長に必要な栄養源であり、「ヒト」から「人間」になるための食べ物である。

どんな親もわが子の成長を願っているはず。しかし、目に見える成長ばかりで内面の成長に欠かせない読書への関心は薄い。そうした親は自らの読書体験も貧弱であるに違いない。



ひろば

< 9月例会報告 > 9/17
(水) 16:30~会報印刷
18:00~例会

出席/片岡 唐澤 久保 小林 小南
斎川 島尻 手嶋 前島 増山 丸岡 桃澤
山口洋 野角・守谷(中途退席)

- 新しい方が3名参加されたため自己紹介から。
- 小南さんは、元川崎市幸区図書館長で、町田市民。図書館利用者懇談会をきっかけに入会。
- 唐澤さん、斎川さんは、中央図書館の嘱託員労働組合から。(P1, P4参照)
- 事業仕分けについて。市長は2、3年に一回仕分けをやりたいといっている。図書館の機能を市民に周知し、図書館利用者を増やすために、会として真剣に考える/「友の会」のような形にして門戸を広げ仲間を増やすことを考えてはどうか。
- 浪江虔書簡集編集作業について(手嶋)・・・9月10日公民館団体活動コーナーにて18時~22時迄、入力原稿を互いに校正する作業を行った。(次回10/8、それ以降11/14日。(P2参照))
- 8月28(木)・29日(金)、千葉市で自治労第80回定期大会が開催され泊りがけでいってきた。今年度は、新たに54単組3253人が承認をされ、新規加入組合を代表し、町田市図書館嘱託員労働組合委員長の野角裕美子さんが挨拶をした。
- 8月29日から31日にかけて、漢籍研究会と町田市民文学館の共催で漢籍目録整理研修会が市民文学館を会場に行われ、会員の山口洋さんが講師を務めた/漢籍研究会は、大学図書館や公共図書館の職員・研究者からなる全国組織で、毎年、各図書館を会場に夏期に研修会を行っている(昨年は身延山大学図書館)。研修の内容は、古典籍整理の経験に応じて班別講習を行い、初心者には古典籍を整理するための基礎知識を伝授し、初級者以上には実際に古典籍整理に携わっているベテラン会員から実務研修を行った。参加者は30名ほどで、遠くは、岡山、京都、仙台、新潟から、町田市からは図書館と市民文学館から6名の受講者があった。また同時に、文学館所蔵の古典籍整理支援も実施。(情報提供・山口)
- 次回以降の例会は、第3水の11/19、12/17。

情報

★横浜市の図書館指定管理者制度問題は、10年度に青葉区の市立山内図書館での1館に制度を

2008年度 第8回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

11月20日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム

町田の作家「和田傳」の作品から 伊藤
「美しいワシサとババヤカ」(ロシアの昔話) 太田
「なら梨とり」(日本の昔話) 倉田
「葉っぱの魔法」(M・マーヒー作) 増山
<語り: まちだ語り手の会> 直接会場へ!

導入する方針を打ち出し10/14の教育委員会で審議される。「横浜の図書館の発展を願う会」など2市民団体は10日、制度導入の反対署名計約2万2千人分を中田市長あてに提出した。立川市の図書館も、とりあえず1館のみ指定管理制度を導入する案を12月市議会にかける模様。市民の運動が拍車をかけている。

★「野津田丘の上秋まつり」/11/3(祝)10:00~16:00/野津田公園ヤマナラシ広場/問い:野津田雑木林の会 045-961-5045 久保

★「町田子どもフェスティバル」/11/9(日)10:00~16:00/南第一小/おはなし会等イベント多数

★脇明子氏講演会「物語が生きる力を育てる」/11/9(日)13:30~16:30/エポックなかはら大会議室(JR南武線)/要申込/主催:生きた学校図書館をめざす会 ☎&F 044-969-3380 船橋

★今年は、イスラエルが建国されてパレスチナに住む人々が難民となったナクバ(大惨事)から60年。パレスチナ人とイスラエル人、2人の監督が共同して撮ったドキュメンタリー映画『ルート181』(4時間半)上映会/11/29(土)13:30~町田市民フォーラム3階ホール/1200円(前売千円)/平和 080-3029-6982

★第10回図書館総合展/11/26(水)~28日/パシフィック横浜(みなとみらい1-1-1)/27日(木)・フォーラム4「指定管理者制度導入をどうするか~国会附帯決議、総務事務次官通達を受けて~」/15:30~17:00 第1会場/講師:大塚由良美(元桑名市教育委員会生涯学習課長)

あとがき 今年も市が子ども達から募集した創作童話の第一次審査に「町田 子ども・本・文化ネット」で関わらせて頂き、延べ27名が300編余の作品を、1編を3人が読み評価するという作業を丸5日間かけてひなた村で行った。最終審査で選ばれた作品は『童話の木』に掲載され2月8日(日)ひなた村で発表会&表彰式が行われる。どの作品が公表されるのか今から楽しみだ。(M¹)